

一、玉子焼きのルセット

「えいつ、ほいつ、よっ」

さいばしを使いながら、奈央は玉子焼きを器用におりたたんだ。

八才にとっては長すぎるさいばし使いも、様になっている。この一年くり返してきたおかげで、自在にあつかえるようになっていた。

「できたよ」

白いワンピースの上からかけていたエプロンをぬぎながら、父をよんだ。ささつとたたんでいすにかけ、ふせていた茶わんを返して手に取る。

「お、できてるな」

父の声と重なり、炊飯ジャーの音が鳴った。テーブルについた父をみて、奈央は髪の毛をさす。

「どう寝たらそうなるの？ カニを頭にのせてるみたい……」

「ん、あ、そうか？」

「先に直してくれば？ ご飯はよそっておくから」

「日曜なんだから、これくらいいいだろー」

「だめよ。くせづいたらどうするのよ」

そういつてしやもじをぬらしていると、洗面所から「ほんとだ」というつぶやき声もれてきた。奈央は吹きだしながら、それぞれにご飯をよそう。

「パパは猫舌だから、穴をあけて、と」

茶わんによそったご飯の中央に、はしで穴をあける。母がいつもしていたように、奈央も父のために「空気穴」を作っていた。

「ふう。ついでに顔もあらってきた」

「もうカニはいないね」

「ははは：：だな。鏡みてびっくりしたよ。左右の髪が横に立って、あれはまるでタラバガニだな。本物だったらありがたいけど、寝ぐせじゃな。うまくない」

じょうだんを交え、父は茶わんの空気穴に、ふうっと息を吹いた。

「じゃ、いただくか」

手を合わせた後、ようやく食事が始まった。みそ汁に、明太子、ウィンナー、あとは玉子焼き。休日の朝の食卓には、必ずとっていいほど、このメニューがならぶ。

母がかつてそうしていたように。

さも当たりまえのように。

「うまい。奈央、おまえまた腕あげたな」

父がはしではさんでいるのは、玉子焼き。

「まあね。ずっとこれ練習してるし」

奈央も一口ほおばった。厚みもちょうどよく、かたさも問題はない。焼き加減も、ずいぶん自信がついただけあって、絶妙だった。

けれど、なにかがおかしい——奈央には、どこか違和感があった。

「なーんか、ちがうのよね」

「ん？ どうした？」

「ううん。なんでもない」

ごまかして、ご飯を口にほうりこむ。

奈央は、何気なく父のとなりに目をやった。

(ママ……)

一年まえまで、そこには母がいた。

朝は、エプロンのポケットに入っているゴムで、長い髪をポニーテールにする。料理のときだけは、髪の毛がジャマだからだ。

さっと結び、それから手早く材料を切り、火を通すあいだに配ぜんをする。どれをとつても、一切のムダがなかった。テーブルに座ってみていた奈央には、それがまるでダンスをしているようにも感じられた。

『橋の上でおどるよ、おどるよ。橋の上で輪になっておどるよ』

学生時代に留学していたという、フランスの童謡の一節を口ずさみ、ステップをふむ。

そんな母の料理で最高だったのが、玉子焼きだった。冷めてもおいしいと、学校でも友達ちにうらやましがられるほどだ。

いつだったか、

『奈央、玉子焼きのルセット（作り方）知り

たい？』

母の言葉にうなずき、習ったことがあった。割り方から、まぜ方、焼き方、切り方と、手取り足取りで教わった。

それは、母と作るはじめての料理だった。みとれていたダンスに加わって、ふたりでおどっている気分だった。

一年まえまで、ダンスはつづいていた。病にたおれて亡くなるまでは、永遠につづくんだと信じていた。

「そうだ」

声がして、奈央は視線を父にもどした。

「三吉神社（みよしじんじや）の秋祭りって、何時からだ？」

「あ、えっと、夕方六時からよ」

「誰かと約束してるのか？」

「してないよ。ミクちゃんは用事で行けないし、ミホちゃん是人ごみがきらいだから」

ほう、と父の目が光るのを、奈央はみのが

さなかつた。

「だったらお父さんと――」

「はいはい。行くから」

父の言葉をまたず、奈央はOKした。本当は、別の友だちに電話をしてみようと思っていたが、こんなかがやきを放たれては、首を横にはふれない。

ただし、

「新しい浴衣、着たいなあ」

しつかりおねだりするのも、忘れなかつた。

二、かおり玉

夕方、外にでるとむわっとした空気がからみついてきた。

空も、地面も、コンクリートの壁も、となりの家の屋根も、夕暮れ色を吸いこんでいた。

けれども、昼間に新しく買ってもらった浴衣のおかげか、いやな気分ではなかつた。父もついでに新しい浴衣を買い、草履も新品にし

ていて、上機嫌だった。

「人が多くなってきたな」

父の草履が、ザツザツと地面をこすり鳴らす。奈央の耳に入るその音は、祭りの気分をいやおうなしに盛りあげた。

歩いて十分ほどで、三吉神社についた。

鳥居をくぐった参道わきには、すでに出店がならび、人も集まっていた。奥にそびえ立つ、しめなわが巻かれた御神木のクスノキも、夕陽を吸って幻想的に色づいている。

奈央は、友だちを数人みつけたが、予想よりはるかに多い人の波は、へたに動くと思えるため、あいさつするにとどめた。

そうでなくとも、勝手な行動はためらわれた。なぜなら、友だちのとなりには、母親が立っていたからだ。なかには、両親そろってきている子もいた。

彼女たちが、奈央に「母親をみせびらかしている」わけではない。奈央も理解しているし、自分も父ときている。

なのに、心の奥はもやっとしていた。

誰かの母親に目がいくにつけ、その誰かに対して腹が立つ。奈央は、誰かの母親をみるほど、自分が「いやなやつ」になっていくのがつらかった。

だからこそ、

「なっちゃん、いっしよに回らない？」

笑顔でさそってくれる友だちに、

「ううん。はなれちゃって、パパが迷子になるといけないから」

じょうだんをいって、楽しんでねと思ってもない優しい言葉をそえて、歩き去った。

「いいのか？」

問いかける父にも、奈央は強がった。

「いいの。パパといれば、いっぱいおごってもらえるしね」

父は「そうか」とつぶやき、しばらくして、またいった。

「そうか……」

奈央は、父の思いも知っていた。

母が亡くなっても、父は涙ひとつ流さなかつた。最初、奈央は「なんでママが死んだのに泣かないの？」と責めた。けれど、それはちがった。

父の目の下や頬は、ぶるぶると震えていた。

「泣かないよ。お父さんは、お母さんとバトンタッチしたから」

これからは、父親のみならず、母親としての役目もうけおったからと。ふたり分の役目を果たすから、ふたり分強くなるんだと。

今にもこぼれそうなくせに、父はぶるぶると顔を震わせて、笑った。

以来、奈央は父がもっと好きになった。

母の作る玉子焼きを、完璧にしたいと思つた。たったひとつだけ習つた、母の味――それを、父に食べさせたいから。

奈央ができる、父への恩返しは、これしか思いつかなかつた。

「よし。食うぞー。夕飯は出店の食べ物だ」

父は、浴衣のそでをまくる仕草をした。気分を変えたかった奈央もうなずいて、人の波に飛びこむ。

つるされた赤ちようちんをひとつ、ふたつとすぎ、まずは焼きそば屋に狙いを定めた。パックに入れてもらい、割りばしでほおぼると、いよいよ祭りモードに切りかわった。

とくに、父のほうが。

「つぎ、何食べようか……あ、パパ。こんなものもあるよ。金魚、金魚」

「金魚を食べるのか？」

「ちがうって。しようよ、ね？」

「奈央、食べ終わってからにしようよ。お父さん、まだまだ腹はふくれてないからさ」

「……はいはい」

「金魚はその後な。じゃあ、おいちゃん、ポイをふたつ、置き置きしといて」

出店で取り置きかい、と苦笑いの金魚すくい
の主人に会釈をしながら、奈央たちはたこ

焼き屋へむかった。たこ焼きをたいらげた後は、お好み焼きを半分ずつにした。

「パパ：：もう限界」

「だな。お父さんも、さすがにあきたよ。体が小麦粉になりそうだ」

意見が合い、食事を終わりにした奈央たちは、取り置きしていたポイで金魚すくいをした。しゃがんでいる奈央のうしろにいた「母子づれ」を気にしながら。

ほかにも、ヨーヨーを釣り、別腹だろうとリング飴をなめ、秋の祭りを味わった。

さんざん回ってくたくたになったころ、人はまばらになってきた。

「ふう。楽しかったな」

私よりパパがね、と笑うと、父は照れくさそうに頭をかく。

「祭りは、やっぱり童心：：子どもの心にもどれるんだよ」

「ま、私も楽しかったからいいけどねー」

奈央たちは、店じまいする出店を横目に、

拝殿まで足をのばした。お賽銭を入れて、手をたたき、お参りをする。

そして、ふとつむっていた目をあけた奈央は、拝殿の左側に気配を感じた。

目をやると、ひものついた木のくいで囲まれた四角い空間の中に、一軒の出店があった。

「パパ、こんなところにもお店あるよ」

参道に場所を取れなかったのだろうか。それにしても、くいでスペースを確保しているあたり、何か特別っぽい期待感がある。

行ってみようか、という父とともに、奈央はひもをまたいで出店のまえに立った。

古びた立て看板には「かおり玉」と書かれてある。

「かおり玉って何かな？」

「さあ。きいたことないなあ」

「いらっしやい」

中から、ふいにしやがれた声が出た。ねじりはちまきをしたおじいさんが、笑顔で腕組みをしている。年齢はかなりのものだろうに、

体つきはかなり大きい。

「あ、あの。かおり玉ってなんですか？」

「これだよ――」

出店の主人がさしだしたのは、缶コーヒーほどの白いビンだった。ビンには、プラスチックの棒が、ストローのように入っている。

「これって、シャボン玉ですか？」

父がのぞきこんでたずねた。

主人は、「まあ」とうなずいた。

「おじょうちゃん。出店は粉ものが多かったろう。今、何が食べたい？」

「食べたいもの……ううん、えっと」

返答をまつあいだ、主人は棒でビンに入った液体をかきまぜていた。

「プリンかな」

「なるほど。口直しのデザートってわけかい。ははは」

雑談をかわしながら、主人は棒を抜いた。

口へくわえると、頬をふくらませ、ふうつとひと吹きする。

——ふうううっ。

かおり玉という名前はめずらしかったが、その実は、ただのシャボン玉らしかった。

ハート型になるでもなし、不思議な色になるでもなし。

ただ、せわしかった祭りの後のシャボン玉は、とても美しかった。

「おっ。玉の中に、満月がおさまってる。いやあ、雅び（みやび）だなあ」

父は、うかぶ大小の玉をのんびりとながめていた。奈央も、うかンでははじけるシャボン玉に、すっかりみとれた。

すると、目のまえでひとつはじけたとき、ふと甘いにおいがした。

（あれ？）

首をかしげる間もなく、においは風に流れて消えた。気のせいのようなだ。

「奈央。これ買おうか」

父の意見に、奈央は賛成した。

「うん。シャボン玉好きだし、それに——」

「それに？」

「甘くていいにおいだし」

「じゃあ、これひとついただけます。おいくらですか？」

けれど、主人は肩をすくめながら「いりませんよ」と首をふった。

「さしあげますわ。ちょうど店をしめるところでしたし」

「え、しかし……」

「あまっても捨てるだけですわ」と、主人は別のビンと棒を手を取った。

『かぎたいものをうかべて吹きなさい』

奈央にわたすとき、主人が小声でささやいた。そして「ごきげんよう」といいながら、看板をたたみ始めた。

「ありがとうございます」

父といっしょに頭をさげた奈央は、ひもをまたいで、神社をあとにした。

三、不思議なだけの役立たず

つぎの日。

学校から帰った奈央は、ずっと気になっていた「かおり玉」を手にとった。くたくただった昨日は、あれからすぐに寝てしまったため、できなかつたのだ。

『かぎたいものをうかべて』

出店の主人は、そういつていた。

目のまえではじけたとき、一瞬だけ甘いにおいがした。あの記憶が正しければ、あれはプリンのおいだ。

(プリン、プリン、プリン)

ためしに、奈央は目をとじてプリンをうかべてみた。しっかりイメージしたところで、棒を口にくわえる。

——ふうううっ。

息を強く吹くと、丸いシャボン玉が部屋に広がった。ここまでは、ごくふつうだ。

だが、つぎつぎ玉がはじけると、甘いおいがもわんと鼻をくすぐった。風で流されない部屋の中だから、においはただよっている。

昨日とおなじ。まちがいなかった。

「まさか、本当にうかべたものにおいがするの？」

偶然かもしれないと、奈央はうたがった。

棒を液につけながら、つぎはカレーを頭に思いうかべてみる。

においのまえに、よだれがでてしまった。

(ダメダメ……カレー、カレー、カレー)

よだれをすすりながら、カレーのことだけを考える。そして、だ液たつぷりの口で棒をくわえる。

——ふうううっ。

さつきとおなじように、シャボン玉が部屋に広がる。ドキドキしながらはじけるのをまつと、今度はちがうにおいがしてきた。

「カレーのにおい！」

かんちがいではなかった。ここずっと、家

ではカレーをしていない。近所ですていたとしても、窓をしめた状態では届かないはずである。

このにおいは、まぎれもなくシヤボン玉から発せられるものだった。

最初はプリンで、つぎはカレー。

「本物……」

出店の主人がくれた、かおり玉。

こんな不思議なシヤボン玉があるものかと思いつながら、奈央はたちまち興奮し、いろいろなものをかべては、吹いてみた。

父が帰ってきた後も、興奮はおさまらなかった。父にも玉の効果語り、実際に吹いてみせた。話半分だった父も、本当に鼻に届くやいなや「おおっ」とうなって、においを味わった。

そして、奈央以上に、はまった。

甘いものの好きの父は、プリン、チョコ、ココアと連続で吹きまくる。しばらくすると、食べてもいないのに、奈央はしこたまデザート

トをお腹につめこんだ気分になっていた。

またつぎの日、そのつぎの日。

奈央はかおり玉をうんと楽しみ、ビンの中身は残り三分の一ほどになっていた。

桃にメロンにリンゴと、片っ端からひらめくものを香った。ためしに、大きらいな病院もうかべてみたが――やはりくさかった。

しかも、変なことをしたからか、入院中の母のことも思いだしてしまった。白いベッドで横になり、いくつも管を通して眠っている姿を。

「ママ……」

ぎゅっと目をつむり、奈央は病におかされるまえの、家でフランス童謡を口ずさむ母の姿をめいっぱいうかべた。

棒をくわえ、かおり玉を吹いてみる。

――ふうううっ。

しかし、はじけた玉からは何も香ってこない。それもそのはず、奈央の記憶からは、い

っしか「母のにおい」が消えてしまっていたのだ。

抱きついたときのにおいも、なでもらったときの手のにおいも。

奈央にとって、たった一年も、されど一年だった。

（うかべ方が足りないのかな……）

そう思って、何度もやり直してみた。

でも、結果はおなじだった。

心には母の記憶が多くを占めているのに、においを思いだせないイラ立ち。奈央は、この不思議な玉に期待した自分が腹立たしくて、

「かおり玉の、役立たず」

ビンにふたをして、乱暴に机の引きだしへしまいこんだ。

ベッドに突っぷすと、久しぶりに母のことを思って、恋しくて、泣いた。

無情にも、部屋にただよう病院のにおいは、いつまでも消えてはくれなかった。

四、母の代わりに

「奈央。朝だぞ、どうかしたのか？」

つぎの日、日曜日の朝。

ドアのむこうで、心配そうな父の声があった。いつもなら、とつくに起きて朝食を作っている時間である。エプロンをし、長すぎるさいばしで、玉子焼きを主にした朝食のしたくをしているはずだった。

一年間、欠かしたことはなかったそれを、けれど奈央ははじめて欠かした。

泣いて、泣いて、泣きつくしたら、むなしくなったからだ。やる気をなくしていた。

「今日は眠いから」

布団にもぐりこんだまま、答える。

ややおいて、

「わかった。じゃあ、今日はお父さんが朝食を作っておくよ」

「よおし」という声がして、ほどもなく水をだす音がきこえてきた。

（料理、ほとんどできないくせに）

父は、基本的にむかしからキレイ好きな性格で、母と分担して家事はこなしていた。けれど、料理だけはへたくそだった。母があまりにうまいため、父は「食べる専門」になっていた。

いったい何をしているのか、冷蔵庫をあけしめする音が、やけに多く耳に入る。

（大丈夫かなあ）

奈央は、だんだん心配になってきた。もぐっていた布団をはぐり、耳をすます。

「こしよう、こしよう、こしよう……どこだ、どこだ」

父のつぶやく声が、小さくきこえてくる。

（こしよはレンジの上のたな）

心の中で、位置を教える。

「油、油、油はどこだ……あぶらかたぶら」
ひとり言のようにつぶやき、また冷蔵庫の開閉の音。

（冷蔵庫に油なんてないわよっ）

心配が、もちのようにふくらんでくる。

「うわっ！ やばい！」

父のさけび声で、奈央はとうとう飛び起きた。しめていたカーテンをあけ、机のいすにかけていたエプロンをひとつ払い、キッチンへむかう。

「パパ！ あとは私がやるから」

よくよくみると、父はちょうど玉子焼きを作っているところだった。といっても、玉子焼きとは名ばかり。こげて形はくずれ、墨汁がこぼれたいり玉子のようだった。

「はは：：奈央のマネしてみたけど、なかなかどうして」

「んもう。けっこう、むずかしいのよ」

ため息をつき、父からさいばしを取りあげる。アゴで食器棚をさすと、父は肩を落とす。て「了解」と、茶わんをならべる係に落ちついた。

「こんなにこげたら、食べられないわよ」

フライパンの墨汁玉子を皿にうつしている

と、父は「でもさ」とうしろからひとつまみして、自分の鼻に近づけた。

「ほら。においはなんとなくだけど、玉子焼き風だろう？」

風って何よ、と奈央はあきれながらも、皿を鼻によせてみる。

（まあ、においは残ってはいるけど……）

でも絶対ちがうわ、といおうとしたときだった。

「あっ！」

奈央はひらめいて、父に墨汁玉子の皿を投げのようにわたした。

「どうしたんだ？ あわてて」

「なんでもない。ならべて」

奈央は、いそいで部屋にもどった。机にかけより、かおり玉を取りだす。

（もしかしたら）

目をとじてうかべたのは、ダンス——朝食を作っているときのキッチンだった。あの場には、たしかに玉子焼きのにおいがしていた。

母のにおいは忘れても、玉子焼きのにおいだけは、忘れていないはずだ。

『奈央、玉子焼きのルセット知りたい？』

あの話をしているとき、さっと作ってくれた玉子焼き。

（黄色くて、中身がとろっとしてて、湯気が
まだもこもこしてる……）

うかべながら、棒を口にくわえる。

——ふうふうっ。

目をあけると、いくつものシヤボン玉がう
いていた。窓からさしこむ朝日があたり、キ
ラキラと光をおびている。

そして、玉がつぎつぎにはじけた瞬間、も
わんとあたたかいにおいを鼻がとらえた。

「ママの玉子焼きだ」

奈央にはすぐにわかった。

甘くて、とろんとしたにおい。しかも、自
分が作ったのとは、どこかがちがう。

「かつお！」

口にしたとたん、すべてを思いだした。

あ のときいわれた、大事なポイントも。

『さとうと塩の量はこれくらいね。あと、大事なポイントはこれ。かつおのだしをまぜるのよ。たくさん入れたらダメよ。玉子の味が消えるから。少しね、少し』

「すっかり忘れてた」

一ヶ所だけちがうと思っていたのは、かつおだしだった。「においのちがい」に気づいていれば、もっと早く思いだしていたのに。

ようやく気がついたと、奈央は手の中のビンに目をむけた。

「役に立つじゃない、かおり玉」

不思議な出店でもらった、かおり玉。もしかすると、これを自分に気づかせるためのものだったのかもしれない。天国にいる母が、あまりにじれったくて、届けてくれたとか。

「……なんて。まさかね」

笑いがこみあげるのと同時に、涙もこみあ

げてきた。

ふう、ふう、ふう。

吹くたびに、なつかしいにおいが、あちらこちらにただよう。

『橋の上でおどるよ、おどるよ。橋の上で輪になっておどる』

いつしか覚えた歌を口ずさみながら、奈央はキッチンへもどり、あらためて玉子焼きを作った。もちろん、かつおだしを入れるのを忘れずに。

「よし。できたあ」

切りそろえて皿に盛ったとき、たしかに母の玉子焼きとおなじにおいがした。

やっと「母の味」が完成した。

「うん。うまいな。やっぱり、奈央の玉子焼きがピカいちだな。はは」

みるみるたいらげる父をみて、奈央はうれしかった。少しだけでも、自分が母の代わりになれたような気がして。

五、残りのすべてで

その日の夕方。

奈央は父をつれ、三吉神社にやってきた。あの出店の主人にお礼がいたかったからだ。情報が少しでもあればと思ったのだが、すぐにその必要がないことに気づかされた。

「パパ。あれって、お参りのときあった？」

奈央がさしたのは、拝殿の左横にある御神木のクスノキだった。祭りにきたときには、幻想的な色づきだったのを覚えている。

しかし、最後に拝殿に足をのぼしたときには、とくに目にも入らなかったのだが。

「えっと、どうだったかな……」

参道を歩き、クスノキのそばに立った奈央は、絶句した。クスノキを囲っていたのが、ひものついた木のくいだったのだ。

「ここよね。出店あったの」

出店の主人は、高齢で、体が大きく、ねじりはちまきをしていた。

対して、今、目のまえにあるクスノキは、樹齡何百年をこえた大樹で、その幹には白いしめなわが巻かれている。

奈央は、おそらく父も、あの出店の主人こそが、このクスノキだったのだと気がついた。

「御神木も、祭りの気分になったのかな」

「ママからのプレゼントを、代わりに届けてくれたのかも」

奈央と父は、御神木にむかって手を合わせた。お札を心の中で伝え、ふと目をあけると、父がかおり玉のビンを軽くふっていた。

「あとちよつとはあるな」

そうだね、と何気なく答えたとき、父はおもむろに棒を手にした。

「奈央はたしか、ママのにおいを忘れたっていったよな」

ビンに棒をさして、かきまぜる。

「うん」

「おいで。お父さんが覚えてる」

言葉の意味が奈央にはわかり、ゆっくりと

そばへいく。

しゃがんだ父は、かおり玉を吹いてみせた。
——ふうううっ。

その瞬間、風がぴたりと止んだ。

つぎつぎに広がり、はじけた玉からは、母のにおいがした。記憶と重なり、奈央は抱きしめられたときの母の温もりも思いだした。香水をつけていない母の、やわらかい、優しいにおいを。

「今日ぐらい泣きなよ、パパも」

父の顔は、あの日のようにぶるぶる震えている。奈央がそでを引っぱると、父は目の端から涙をこぼし、せきを切ったように泣いた。つられて、奈央も泣いた。

（玉子焼きも覚えたし、これからは私がママの代わりになるから。まかせて）

そう、母にいいながら。

最後の玉がはじけた後も、しばらく、母のにおいは辺りにただよっていた。

了